

総合研究大学院大学 文化科学研究科 学術交流フォーラム・総研大文化フォーラム

【開催状況】

平成 22(2010)～平成 27(2015)年迄、「学術交流フォーラム」の名称で、5 回実施。その後、フォーラム事業の実施体制見直しのため、平成 25(2013)年度の事業企画は休止となり、平成 28(2016)～令和 4(2022)年まで「総研大文化フォーラム」の名称で、7 回実施。

【年度ごとの実施詳細】

平成 22(2010)年度

平成 22 年度 学術交流フォーラム 2010

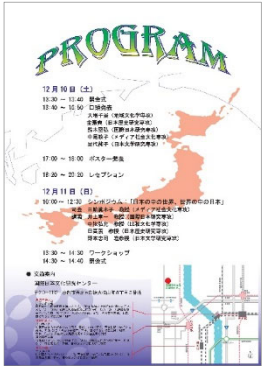
開催年月日	平成 22(2010)年 11 月 6 日～7 日
会場	TKP 東京駅八重洲ビジネスセンター
テーマ	共生
参加者数	学生 24 名、教員 22 名、事務 11 名(計 57 名)
担当教員	日本文学研究専攻長 中村康夫
学生企画委員	7 名
学生企画委員会開催数	8 回



平成 23(2011)年度

平成 23 年度 学術交流フォーラム 2011

開催年月日	平成 23(2011)年 12 月 10 日～11 日
会場	国際日本文化研究センター
テーマ	「日本の中の世界、世界の中の日本」
参加者数	学生 26 名、教員 16 名、事務 13 名(計 55 名)
担当教員	国際日本研究専攻長 戸部良一
学生企画委員	8 名
学生企画委員会開催数	8 回



平成 24(2012)年度

平成 24 年度 学術交流フォーラム 2012

開催年月日	平成 24(2012)年 10 月 21 日～22 日
会場	国立歴史民俗博物館
テーマ	「博物館の役割－集める・保つ・伝える・究める－」
参加者数	学生 17 名、教員 23 名、事務 16 名(計 56 名)
担当教員	日本歴史研究専攻長 仁藤 敦史
学生企画委員	6 名
学生企画委員会開催数	5 回

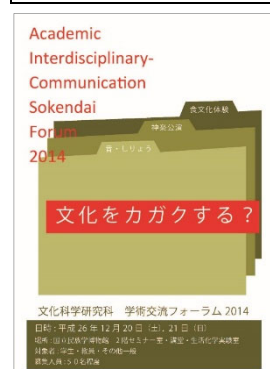
平成 25(2013)年度

※フォーラム事業の実施体制見直しのため、平成 25 年度の事業企画は休止

平成 26(2014)年度

学術交流フォーラム 2014

開催年月日	平成 26 年 12 月 20 日～21 日
会場	国立民族学博物館
テーマ	「文化をカガクする？」
参加者数	学生 23 名、教員 27 名、事務 10 名(計 60 名) ※みんぱく共催石見大元神楽来場者数:278 名
担当教員	地域文化学専攻長 佐々木 史郎
学生企画委員	6 名(+フォーラム事務局 1 名)
学生企画委員会開催数	8 回



平成 27(2015)年度

学術交流フォーラム 2015

開催年月日	平成 27 年 11 月 21 日～22 日
会場	国文学研究資料館
テーマ	「文学際—「文化科学」を発見する—」
参加者数	学生 23 名、教員 28 名、事務 8 名(計 59 名)
担当教員	日本文学研究専攻長 山下 則子
学生企画委員	6 名
学生企画委員会開催数	8 回



平成 28(2016)年度

総研大文化フォーラム

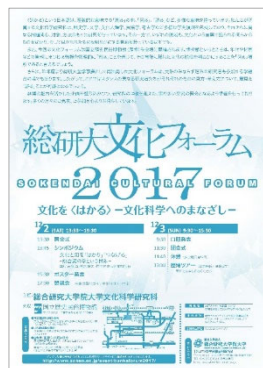
開催年月日	平成 28 年 12 月 10 日(土) ～ 11 日(日)
会場	国際日本文化研究センター
テーマ	異文化へ旅する、異分野を旅する ―文化科学からの招待状―
開催趣旨 (実施年度の募集要項から 抜粋)	文化科学研究科が開催してきた学術交流フォーラムは、総研大全学事業の一環となる「総研大文化フォーラム」として再出発します。 新生フォーラムは、文化科学研究科のみならず、総研大全体において文化科学研究に関心を持つ学生・教員が一堂に集まり、学際的な学術交流を行うことを目的とします。そして、文化科学研究科が編集する学術誌『総研大文化科学研究』と共に、総研大における文化科学研究の学風の確立と発信を目指していきます。 その第一歩となる総研大文化フォーラム 2016 のテーマは、「異文化へ旅する、異分野を旅する―文化科学からの招待状―」です。文化科学研究と一口に言っても、その研究分野は多岐に亘ります。しかし「私」とは異なる文化を理解しようとする知的好奇心は、文化科学研究全体で共通するものがあるでしょう。また、総研大には、専門を異にする多くの研究者が在籍していますが、「異文化」と向き合いつつ、「異分野」に出会うことも目指したいと思います。 そこで本フォーラムは、皆様の知的好奇心を大いに刺激する旅となることを目標に、京都に立地する国際日本文化研究センターにおいて開催致します。研究科を問わず、多くの方々の参加をお待ちしています。
発表数	口頭発表 4 件、ポスター発表 18 件
講演会	「遊牧世界からのメッセージ」
参加者数	学生 37 名、教員 36 名、事務 12 名(合計 85 名 内他研究科 7 名、他大学 11 名)
担当教員	国際日本研究専攻長 伊東 貴之
学生企画委員	7 名(+フォーラム事務局 1 名)
学生企画委員会開催数	3 回



平成 29(2017)年度

総研大文化フォーラム

開催年月日	平成 29 年 12 月 2 日(土) ～ 3 日(日)
会場	国立歴史民俗博物館
テーマ	文化を<はかる>ー文化科学へのまなざし
開催趣旨 (実施年度の募集要項から 抜粋)	<はかる>という日本語は、理数的な意味での「測る」の他、「図る」、「語る」など、多様な意味を持っています。私たちが所属する文化科学研究科は、歴史学、文学、文化人類学、民俗学、考古学など多様な学問領域を包摂しており、それぞれに異なる問題関心、対象、方法のもとに研究を行っています。その一方で、いずれの領域も、文化という言葉で括られる何らかのものはかり、そしてはかられたものを明らかにする側面を持っているはずです。また、今回の文化フォーラムは国立歴史民俗博物館(歴博)を会場に開催されます。博物館というところは、年代や材質などの資料にまつわる情報を物理的に「測る」ことを通じて、その背後に隠れた文化の様相を明らかにすることを「図る」場所であると言えるでしょう。 さらに、昨年度より総研大全学事業として再出発した文化フォーラムは、文系のみならず理系の研究者も参加する学融合の場でもあります。したがって、ここではスタンスの異なる研究者たちがそれぞれのものの見方・考え方について、意見を「語る」ことが可能となるでしょう。 歴博の魅力を活かした企画を盛り込みつつ、研究科の垣根を越えた、実り多い交流の機会となるよう準備を行っております。多くの方々のご発表、ご参加を心よりお待ちしております。
発表数	口頭発表 4 件、ポスター発表 17 件
シンポジウム	文化と知を「はかり」「つなげる」ー総合資料学という試みー、講演数 2
参加者数	学生 28 名、教員 33 名、事務 16 名(合計 77 名 内他研究科 5 名、他大学 4 名)
担当教員	日本歴史研究専攻長 坂本 稔
学生企画委員	6 名
学生企画委員会開催数	4 回



平成 30(2018)年度

総研大文化フォーラム

開催年月日	平成 30 年 11 月 23 日(祝・金) ～ 24 日(土)
会場	国立民族学博物館
テーマ	知をわかし、ひとをつなぐー研究成果の共有と還元
開催趣旨 (実施年度の募集要項から抜粋)	わたしたちは研究者のひとりとして、日々研究に邁進しています。調査と分析、試行錯誤と議論を重ねて深まっていく研究は、一見して個人的で孤独な営みのように思われますが、その実、研究対象であるひとびとや周囲の同僚・友人、また社会全体に支えられている協働作業に他なりません。それゆえに、研究成果は個人のものであるとともに、社会全体のものであるといえます。ひとりの手元に置いておくのではなく、他の研究者、ソースコミュニティ、社会などに対して、広く共有し、還元することが、わたしたち研究者には求められているのです。成果物を直接ソースコミュニティに提供することはもちろん、地域のひとびとと共に成果物を共有可能な形で作り上げることも、その方法のひとつといえるでしょう。 今年度のテーマは「知をわかし、ひとをつなぐー研究成果の共有と還元」です。それぞれの学問領域において、どのように研究成果を共有し、還元する実践がなされているのか、また今後どのような可能性があるのか、文化フォーラム全体を通して考えていきます。 2018 年度の文化フォーラムは、国立民族学博物館(みんぱく)で開催されます。みんぱくでは、これまでに収集してきた様々な資料や情報を「人類の文化資源」として、ひとびとと共有し、還元する取り組みを行っており、本年度のテーマにぴったりの場所です。ご参加のみなさまには、昨年開館 40 周年を迎えたみんぱくと合わせて楽しんで頂けるよう、準備を進めております。 今年度の文化フォーラムが、日々の研究成果を「わかし」、学問領域を横断し、ひとを「つなぐ」場となれば幸いです。みなさまのご参加を、心よりお待ちしております。
発表数	口頭発表 10 件、ポスター発表 9 件
シンポジウム	「ひろがる知、つながるひとの輪」、報告数 4
参加者数	学生 30 名、教員 25 名、修了生 3 名、事務 15 名(合計 73 名 内他研究科 3 名)
担当教員	地域文化学専攻長 齋藤 晃
学生企画委員	9 名
学生企画委員会開催数	4 回(メール審議 1 回含む)



令和元(2019)年度

総研大文化フォーラム

開催年月日	令和元年 11 月 30 日(土)～12 月 1 日(日)
会場	国文学研究資料館
テーマ	「境界を行き交う知」
開催趣旨 (実施年度の募集要項から抜粋)	総研大文化フォーラムはこれまで 3 度の開催を通じて、多彩な分野の研究者たちの豊かな対話の架け橋となってきました。本年度は「境界を行き交う知」というテーマのもと、さまざまな学問領域を越境し横断する総研大の学際性をより活性化していくことを目的に開催いたします。「境界を行き交う知」というテーマは、研究者がさまざまな地域・文化間の境界を越えてそれぞれとの交渉を重層的にとらえることと同時に、広くは文系・理系として隔てられてきた学問領域の境界を越えて触発し対話することをも意味します。 今回のフォーラムには、他分野から訪れた研究者が新たな知をもたらすことで、ある分野が活性化される契機となるばかりでなく、自身も他分野の知見にふれることによってその知的生産に携わる機会となつてほしいという願いが込められています。 分野間の交流と連携による知の共有は、他者に自身の研究をわかりやすく伝えるために言葉を練り上げる好機であり、研究者として異分野間の対話で起こりうるさまざまな対立にいかに取り組むのかという共生の実践でもあります。そして、未だだれも見なかった知の産出の連鎖とともに構成する営為です。 多様な学問領域に携わるみなさまが、分野間の境界を越えてさまざまな方法論、発表方法、研究成果をともに分かち合えるフォーラムとなるように準備を行っております。みなさまのふるってのご参加を、心よりお待ちしております。
発表数	口頭発表 6 件、ポスター発表 8 件
シンポジウム	「知の境界を行き交う—学際知の実践と展望」、報告数 3
参加者数	学生 26 名、教員 32 名、事務 15 名、一般聴講 10 名(合計 83 名 内他研究科 6 名、学外発表者 2 名)
担当教員	日本文学研究専攻長 落合博志
学生企画委員	11 名(極域科学専攻学生 2 名を含む)
学生企画委員会開催数	1 回(メール審議及びグループウェア Slack を活用)



令和 2(2020)年度

総研大文化フォーラム

開催年月日	令和 2(2020)年 12 月 5 日(土)～6 日(日)
会場	国際日本文化研究センター(オンライン併用開催)
テーマ	「文化のレジリエンスとは? :〈異〉をつなぎ、未来へ」
開催趣旨 (実施年度の募集要項から 抜粋)	今、私たちは、新型コロナウイルス(COVID-19)をはじめとし、国家間対立、民族紛争、自然災害など様々な困難に直面し、文化や文化研究に何ができるのかを問われています。 人類の歴史を振り返ると、こうした予期せぬ事態に幾度となく見舞われ、そのたびに試行錯誤し、乗り越えてきました。私たちは文化の柔軟性や多様性を考え信じることによって、〈異〉なるもの同士の対話を促し、未来に向けて歩を進めていかなければなりません。そこで、本年度のテーマは「文化のレジリエンスとは? ―〈異〉をつなぎ、未来へ―」を掲げます。 レジリエンスとは「復元力」「反発性」「弾力性」「再起性」「適応力」「柔軟性」「回復性」などといった広い意味合いを持った言葉です。今回のフォーラムではあえて定義をせず、多彩な視点から「文化のレジリエンス」を検討することによって、文化科学の可能性を共有したいと思います。さらに、文化科学研究の知見で社会におけるレジリエンスを問い直すという、より踏み込んだ視点も提供したいと考えています。 今年の総研大文化フォーラムは、国際日本文化研究センターをメイン会場とし、オンラインでの参加もできるように環境を整備します。学問的垣根を問わず、様々な〈異〉をつなぐ機会となるように、皆様の参加をお待ちしております。
発表数	口頭発表 6 件、ポスター発表 6 件
シンポジウム	「災いから考える文化のレジリエンス」、報告数 4
参加者数(のべ人数)	1 日目 95 名、2 日目 76 名
担当教員	国際日本研究専攻長 稲賀 繁美
学生企画委員	8 名
学生企画委員会開催数	8 回(すべて Web 会議)。その他グループウェア Slack 上での議論等



令和 3(2021)年度

総研大文化フォーラム

開催年月日	令和 3(2021)年 12 月 4 日(土)～5 日(日)
会場	オンライン開催
テーマ	「あそびを多角的に見つめる」
開催趣旨 (実施年度の募集要項から 抜粋)	昨年から続く新型コロナウイルスの蔓延で人々は疲弊し、国際社会に目を向ければ紛争や人種差別といった問題が山積しています。そのような中でも人はあそぶことを忘れず、前を向いて歩く力を涵養しています。また、コロナ禍においては人と人の交流が困難になった面があります。あそびは交流の一形態でもあり、共にあそぶことは人と人を結びつけ、互いに理解し認め合うことに繋がると考えています。 本テーマの「あそび」は、「余裕」や「ゆとり」といった意味を含んでいます。余裕やゆとりがなければあそぶこともままならず、相互理解にはほど遠いように思います。「余裕」「ゆとり」、あるいはそこから生まれるものの力とはどのようなものか一緒に考えていくことで、人の持つ力の一端を明らかにする一助となるのではないのでしょうか。 本フォーラムでは多様な分野の人々が交差します。互いに議論し合い認め合うことで新たな境地を開くことはもちろん、他者と相対化することで自身の研究の立ち位置も知れるでしょう。移動の制限される昨今、多分野の人と交流することは貴重な機会になると確信しています。一人一人の好奇心から生まれた研究を語り合い、認め合い、発展させ合う場としたいと思っております。 今年度の文化フォーラムは、国立歴史民俗博物館(歴博)がホスト機関ですが、当日はオンライン開催とする予定です。対面での交流は叶いませんが、代わりに物理的な制約は少なくなります。その利点を活かしたフォーラムを実現するべく、準備を行っております。みなさまの参加を心よりお待ちしております。
発表数	口頭発表 3 件、研究紹介リレー8 名(教員 1 名、学生 7 名)
シンポジウム	「あそびを多角的に見つめる」、報告数 4
参加者数(のべ人数)	1 日目、2 日目の合計 103 名(申し込みベース)
担当教員	日本歴史研究専攻長 樋口 雄彦
学生企画委員	9 名
学生企画委員会開催数	9 回(すべて Web 会議)。その他グループウェア Slack 上での議論等



令和 4(2022)年度

総研大文化フォーラム

開催年月日	令和 4(2022)年 10 月 1 日(土)
会場	国立民族学博物館
テーマ	「文化科学研究の行方」
開催趣旨 (実施年度の募集要項から 抜粋)	2023 年 4 月、総合研究大学院大学は体制を刷新し、先端学術院先端学術専攻 20 コース体制(仮称)として文理融合の新たな知が創造される場となる予定です。それに伴い、これまで文化科学研究科が主催してきた総研大文化フォーラムは、今年度が最後の開催となります。 今回の総研大文化フォーラムでは、文化科学研究科の過去を振り返るのではなく、未来を考えるという趣旨のもと、「文化科学研究の行方」というテーマを設定しました。一昨年から続く新型コロナウイルス感染症の世界的な流行、さらには、世界各地の紛争など、世界は今、混とんとした状況にあります。激動の渦のなかで私たちの周囲の環境は一変しました。人びとは移動の自由を奪われ、わずかな時間と空間のなかで日々を過ごすことを余儀なくされています。こうした状況において、フィールドワークをすることや文化を研究することの意義が、改めて問い直されています。私たちは、この困難を乗り越え、新たな知の地平を切り開かなければなりません。今回の文化フォーラムでは、「文化科学研究の行方」というテーマのもと、そうしたトピックについても、みなさんと一緒に考えていきたいと思っています。 今回はあえて広いテーマを設定することで、様々な学問分野の学生が発表・交流しやすいフォーラムになればと考えており、学生の発表を中心に進めていく予定です。多様な分野の学生が「文化科学研究」の未来と可能性について活発な議論ができるよう準備を進めてまいります。 今年度の総研大文化フォーラムは、大阪府吹田市にある国立民族学博物館(民博)を会場とし、対面とオンラインのハイブリット形式で開催します。今回の文化フォーラムが、「文化科学研究」の未来に貢献できるような場になれば幸いです。皆様のご参加を、心よりお待ちしております。
発表数	口頭発表 8 件(学生 8 名)
参加者数(のべ人数)	1 日目、2 日目の合計 103 名(申し込みベース)
担当教員	地域文化学専攻長 信田敏宏
学生企画委員	7 名
学生企画委員会開催数	6 回(Web 会議、うち 2 回はメール審議)

